

古代楽人の靈力

楽人師延の靈力

古代中国には並外れた靈力をもつ楽人がいたとされている。三皇（伏羲・神農・女媧）・五帝（黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜）という伝説上の皇帝のときにも、皇帝のそば近くに仕える楽人がいたようだ。まず、王子年の『拾遺録』（『太平広記』巻203所収）をみてみよう。

師延は殷の楽人である。伏羲の時代から代々楽人の仕事をとりおこなってきた。師延に至っては、陰陽の働きに詳しく、天体の運行に通曉しており、彼の人となりはついに知られることはなかった。時代はうつりかわり、師延はある時は君に仕え、ある時は在野にあった。黄帝の時代に、音楽を司る官となった。くだって殷の時代となり、三皇五帝の音楽をすべてまとめた。師延が一絃の琴を奏でると地の神々があらわれ、玉律を吹けば天の神々が降臨した。黄帝の時、師延はすでに数百歳だったが、国々の音楽を聴いては、その王朝の興亡の予兆を読み取った。（師延者、殷之楽工也。自庖皇以来、其世遵此職。至師延，精述陰陽，曉明象緯，終莫測其為人。世載遠絶，而或出或隱。在軒轅之世，為司樂之官。及乎殷時，總修三皇五帝之樂。撫一絃之琴則地祇皆升，吹玉律則天神俱降。當軒轅之時，已年數百歲，聽衆國樂聲，以審世代興亡之兆）

『拾遺録』とは、東晋の道士である王嘉（字は子年）が三皇五帝以来の奇怪談を記したもので、それゆえに『拾遺記』とも呼ばれる。東晋は317～419年の間、江南に開かれた王朝であり、当時仏教をつうじてインド起源の神秘物語、譬喩譚、さらに怪奇談がひろがり、それが刺激となって中国でも志怪小説と呼ばれる作品がうまれた。ここに引いたものも、そのなかの一つである。ただ、師延については『韓非子』や『史記』などにもその故事がみえることから、純粋に王嘉の創作というよりも、伝承の記録といえよう。それが事実か否かはまったく別として、楽人の非凡な能力が、どう認識されていたかがここに窺える。

まず、師延は伝説上の黄帝の御代から、殷（BC1600～BC1120）まで生きていたところからして、尋常の人ではないとの前提が示される。さらに師延の優れているのは、自然の理、天体の動きに精通していたことである。彼の人となりは知る由もなくなぞではあるが、人智を極めた者が紡ぎだす音にこそ威力があると言うのであろう。

そのような人並外れた能力をもつからこそまた彼は、三皇・五帝の音楽をまとめあげることができた。その音楽がとりわけ重要なのは、「一絃の琴を奏でると地の神々があらわれ、玉律を吹けば天の神々が降臨」するように、皇帝たちが神々と交流するうえに不可欠なものだと考えられたからであろう。これは、最古の楽官である夔が作り出した「神と人とが和合する」音楽のあり方とも重なる。

さらに続いて、為政者にとって重要なもうひとつの音楽のあり方が記されている。それは、音楽は世情を映し出し、それゆえに、世情の安定や混乱の指標となるというものだ。優れた楽人こそがそれを察知できるとされていたのである。

音楽から世情を読み取る

音楽は、世情をダイレクトに映し出してくれる。その音楽

のあり方を確固たるものとしたのが、次にあげる儒教の經典『礼記』の楽記であろう。『礼記』は前漢において、先秦以来の儀礼についての議論をまとめた書物である。

そもそも音は人の心に生じるものである。内なる感情が動いて、声として形になり、声は文られて音になる。だから治世の音は、安らかで楽しい、その政治が平和であるからだ。乱世の音は、怨みをおび怒気が感じられる、その政治が歪んでいるからだ。亡国の音には、哀しく悲痛な思いがこめられている、その民が困窮しているからだ。声音のありかたは政治と通じているのだ。（凡音者生人心者也。情動於中，故形於声，声成文謂之音。是故治世之音，安以樂，其政和。乱世之音，怨以怒，其政乖。亡国之音，哀以思，其民困。声音之道与政通矣）

音楽が人々の心のありようを映し出すという考えには、いまの我々も頷くところがある。つまりこれは、音楽の本質をひとつの側面からの的確に捉えた言説といえよう。こうして音楽は、深く人心と結びつくゆえに、社会の安定や混乱を示す指標として、時の為政者にとって看過できないものとなっていく。王朝が交代するたびに、まず宮中儀礼の中心となる音楽の整備が急がれるのは、それが世のあり方、ひいては世を治める皇帝の徳までも映し出すとされたからである。そして師延のような楽人こそは、それを聴きとる能力をもつとされた。

世情を変える音楽の力

音楽が世情を映し出す一方で、音楽によって世情を変えられるとも考えられていた。秦始皇帝期に編まれた『呂氏春秋』の「古楽篇」には、伝説上の炎帝（朱襄氏）の楽人土達が奏でる音楽の威力が記されている。

音楽の由来は尊く、決して廃することはできない。適切であるときもあるが、過ぎるときもある。正しいときもあるが、乱れているときもある。賢い者はそれによって世を榮えさせるが、愚かな者はそれによって世を亡ぼす。いにしへの世において炎帝（朱襄氏）が天下を治めていた折に、風が強く陽気が蓄積し、万物が散り落ち、実りがなくなってしまった。そこで土達が五絃の瑟を演奏すると、陰気がやってきて、あらゆる生き物は落ち着いた。（樂所由来者尚也，必不可廢。有節有侈，有正有淫矣。賢者以昌，不肖者以亡。昔古朱襄氏之治天下也，多風而陽氣畜積，万物散解，果實不成。故土達作為五弦瑟，以來陰氣，以定群生）

楽人土達

が弾いた五絃の瑟はどんな楽器だったのか。それは、伏羲や神農が



『中国音楽史図鑑』（人民音楽出版社 1988年）22頁より作られたとされる由緒ある楽器であり、古代より琴とならんで重んじられた。写真にあげたように、湖北省の曾侯乙墓（戦国前期のもの）の出土例が、古来用いられた瑟の姿をおぼろげながらも伝えてくれる。陰陽の狂いを調べて、自然を調和させ、世を安定に導く力を、土達の弾く瑟は持っていた。靈力をもつ楽人は、為政者にとって不可欠な存在だったといえるだろう。